

あなたが覚えていてくれば

私は祖父が13人います。もちろん、一人は私と血が繋がっている母の父親ですが、あと12人は東京に住んでいる元ホームレスのおじさんたちです。私は去年、東京で留学していた時、台東区で路上生活を送っている方を援助する山友会というNPOを通して5ヶ月ボランティアをしていました。その時、山友会でボランティア活動をしていた12人の元ホームレスのおじさんが私の卒業論文のために人生話を記録させていただきました。今から、そのおじさんたちの話を少し共有したいと思います。

ほとんどの人は体力がなくなったり、仕事が見つけれなくなったり、というような理由で前にしていた日雇い労働者の仕事ができなくなって、生活保護を受けられる年になるまで、路上生活をしていました。山友会に助けられて、恩返しをするために、学生や主婦や修道女の方と一緒に他のホームレスを助けるボランティアをしています。みなさん高齢者で、一番上の方は今年の8月14日に88歳になります。この人々は家族との繋がりが希薄になってきて、田舎に残した妻や子供がいても、連絡を取っていないという話が多かったです。地元で妻と子供がいたが、東日本大震災で死んだかもわからないというおじさんもいました。多くのおじさんの場合は、結婚しておらず、だんだん兄弟との関係が薄くなっていて、家族の集まりにも顔を出せなくなったという話を何度も聞きました。こういう話を聞くと、このおじさんたちは孤独でかわいそうだなあと思うかもしれませんが、しかし、毎日山友会に来て、お茶を飲んだり、仲間とボランティアたちと喋ったり、お互いを助け合ったりして、コミュニティーがちゃんとできています。お金や血縁家族がなくても、毎日楽しく生きているおじさんの笑顔を見ると、高齢者が生きがいを持って生活するには何が大切かと考えるようになりました。その答えは、おじさんたちが教えてくれました。

自分がしばらく顔を出さないと、誰かが見にきてくれること。自分が問題があったら、誰かが手伝ってくれること。自分が死んだら、誰かがお葬式の手続きをちゃんとしてくれること。自分が死んでも、誰かが写真を貼って、毎日その写真に顔を向けて生活してくれること。自分が無縁仏にならず、誰かが覚えてくれていること。今年で88歳になる最高齢のおじさんは東京大空襲で両親を失ったんですが、自分は無縁仏にならないと分かっていることが幸せです、今自分は心配することは何もないと言っていました。

世界、特に日本は無縁社会となっていくことをよく聞きます。集権化、離村傾向、過労などで、人の繋がりが断ち切れそうになっているということです。その結果、孤独に生きている人たちがたくさんいるし、孤独に死ぬ人もたくさんいます。それは悲しいだけではなく、もったいないと思います。お年寄りの人話を聞くと、その人が持っている知識や経験が聞く人に伝わって、生き続けます。その話を心に受け入れると、その人の一部は消えないということです。高齢者の方が避けられない死に向かう切ない時にも、誰かが自分のこと。自分が生きてきた人生を覚えていてくれることで救われます。どんな生活を送っていても、どんな人生を生きてきても、この世からひっそりと消えてしまうなんてことを誰にもさせないようにするべきだと思います。

私がこのボアランテアで学んだ一番大切なことは、たとえその方がなくなったとしても、その方の魂や思い出話はその方と繋りを持っている周りの人たちの心の中で生き続け、長く語り継がれていくということです。そうすれば、死というのは決して終わりではありません。